NIEフォーラム

NEWSPAPER IN EDUCATION

2024 第3号

目　次

機関誌編集委員会　企画論文

情報を活かし自ら考えて行動できる実践力を高めるために
－社会の一員として地域に広がる主体的な福祉学習－ …… 吉原　久貴　1

実践報告

メディアリテラシーを育むNIE探究活動
～日本NIE学会主催「NIE生徒研究発表会」の取り組みを通して
…… 為重　慎一　9

日本NIE学会

情報を活かし自ら考えて行動できる実践力を高めるために

－社会の一員として地域に広がる主体的な福祉学習－

To Enhance Practical Skills of Thinking Independently and Acting Based on Information
– Proactive Welfare Learning Spreading into the Local Community as a Member of Society–

吉　原　久　貴
Hisaki YOSHIHARA
（和泉市立芦部小学校）

１　はじめに

近年，地域社会の課題として，障がい者の雇用や高齢者の老老介護の問題，生活困窮者の増加など様々な福祉に関する課題が新聞やニュース等で取り上げられている。

それらの情報がインターネットやSNSの普及により得られやすくなったことで，教育の場でも情報の取り扱い方が変わってきている。GIGAスクール構想で進んだ１人１台パソコンの普及から，児童らはインターネットでの検索を中心とした情報活用が容易に可能となった。しかし，インターネットやSNSを中心とした情報活用は，難しい社会問題について様々な視点での意見がタイムリーに取得できる一方，エコーチェンバーのように偏った見方や極端な考え方を引き起こす恐れがある。複雑になった情報を正しく分析評価し，創造的に自己表現できるよう，得た情報から児童らが自ら判断し，社会の中で自分らしく生きていく術を身につける必要がある。

これらの課題に対し，第４期教育振興基本計画（2023）では，児童のウェルビーイングの向上について「身体的・精神的・社会的に良い状態であり，生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福が得られること」や「多様な個人がそれぞれ幸せや生きがいを感じ，取り巻く場や地域，社会が幸せや豊かさを感じられること」ができるよう支援していく必要性があると述べている。

地域，社会との関わりを通して児童が学んでいく指針として，文部科学省（2022）は，社会を生き抜く力や地域の課題解決を社会の構成員の一人として主体的に担うことができる力を身につけるために「主権者教育」の推進が挙げられている。

主権者として地域・社会へ参画する意識は，児童の社会的ウェルビーイングの向上につながるとともに，活動を通して自己理解を深めることで自己肯定感や自己有用感を高めることにつなげられると考える。

また，赤池（2023）は主権者教育を扱うにあたり，メディアリテラシーについて「社会の課題は教育の課題」と捉え，「教育と新聞社が連携して取り組むNIEの最大の意義は，民主主義を担う主権者の育成に貢献することである」と指摘している通り，メディアから有用な情報を得て活用に繋げることが必須となる。特に，地域・社会や政治に関する情報は近年のSNSの発信では立場や視点によって情報に偏りが生じてしまうことから，適切な情報ソースを選択し，適切な情報収集ができる能力が必要となる。

自分の住む地域や都道府県について学ぶことについて，小学校学習指導要領解説社会編（2017）の中学年で記載されており，地域の仕組みについて児童らは学ぶ機会がある。主権者教育と社会科の学習において，織田（2016）は「主権者教育は今に始まった教育ではなく社会科にとって，それは創設以来の使命であるとともに，社会科だけの課題ではなく，すべての教育活動にわたる課題であり，学校ぐるみで取り組まなければならない」

と述べていることから，社会科での地域学習だけで学習を終えるのではなく，児童らが社会参画する視点での学習に広げる必要がある。

このことから，社会科で既習の内容を深め，総合的な学習の時間を活用し，自分や他者の幸福のために地域参画する意識を高めるよう，社会福祉について学ぶ「福祉教育」が重要であると考えた。

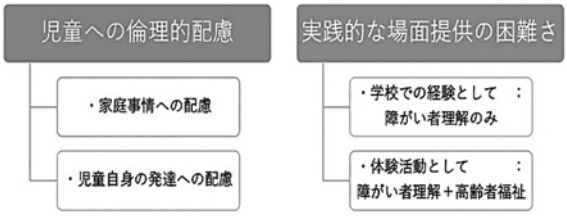
大阪府（2010）が掲げる「福祉教育」には「知識面」「心情面」「行動面」の３観点が挙げられている。「知識面」“知識の理解”は資料活用を，「心情面」“心情の育成”は道徳や人権教育を通して習得を促すことができる。その上で，知識と心情を生かし，地域の一員として参画する力を広げる「行動面」“実践力の向上”が重要となる。

しかしながら，実践力を育むにあたり学校内の経験での習得は難しい。そこで，本研究では福祉が身近なものとして捉えられるよう生活圏の地域活用を通して自身のウェルビーイングを高め，将来主権者として地域社会へ参画できる「生きる力」として実践力が育めるよう本主題を設定した。



社会福祉の領域と福祉教育の課題において，社会福祉の領域には社会福祉六法に基づき「生活困窮」「子ども福祉」「ひとり親への福祉」「高齢者福祉」「障がい者福祉」等が挙げられる。それぞれの福祉領域について幅広い視点での学びは資料から知識として理解できる一方，自分たちの生活に繋がっていることを理解できる児童は少ない。反面，認知症や貧困家庭のネグレクト，障がいなど具体的な事例を扱うことで児童の生活に直接つながり過ぎ，倫理観を破壊しかねない。

ここでは適切な情報を提示しつつ，児童らが選び抜いた情報も相互に配慮し合える内容である必要がある。そのため，児童への配慮をしつつ教材を吟味する必要がある。本研究では地域の場面や地域人材の活用を通して「障がい者福祉」と「高齢者福祉」の２点に絞り，公共場面における配慮の違いを対比しながら検討することにした。



本研究では「障がい者理解」「高齢者福祉」を対象とする。

2　研究目的

①地域社会で活用できる幅広い福祉の知識や心情の習得をするとともに②地域の課題を具体的に対比して考え，実践力の素地の形成を目指す。

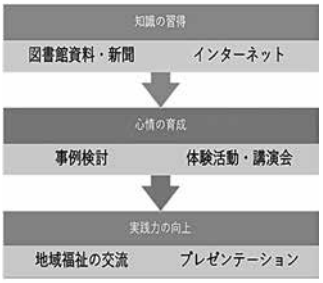
Ⅰ	知識の理解：様々な情報ソースやツールを用いて個別最適な学びの場となるよう情報活用の手法を児童が主体的に選択できる学習場面をデザインすること。
Ⅱ	心情の育成：地域活用で体験や講話を通して「人」とつなげ，振り返りを行うことで，自身の生活や人との関わりをメタ認知し，心情理解できる機会を保障すること。
Ⅲ	実践力の向上：地域の場面の事例検討を通して「もの」「こと」とつなげ，協働した学習展開を行うことで，自己理解や社会参画へ自分の考えと向き合う機会を保障すること。

3　研究方法

本研究では図書館教育とICT活用を組み合わせ，カリキュラムマネジメントを行うこととした。第３学年社会科の地域調べに取り組んでいるため，第４学年の総合的な学習の時間で実施することにした。GIGAスクール構想の１人１台PCやロイロノートの導入が学習環境の向上に寄与しており，情報カードや新聞，スライド作りなどICT機器で徐々に作成できるよう計画している。福祉についての資料活用に加え，地域調査も情報活用として取り入れて計画を進める。なお，効果測定は社会性測定用尺度を各学期末に実施し，結果を分析する。

４　研究実践　－児童の活動より－

１学期は「Ⅰ知識の理解」として絵本の読み聞かせや福祉調べ，まとめ新聞の作成を行った。２学期は「Ⅱ心情の育成」として体験活用や共同活動，講話など当事者や支援者の理解を深めた。３学期は「Ⅲ実践力の向上」として公共施設の事例検討，職業調べや福祉事業職員の講話を通して，実践的な対応について学んだ。



１学期の取組み：多様な資料との出会いから

資料活用をすすめるにあたり，学習段階に合わせたワークの開発を行い，児童らが取り組んだ。興味をもち反復して取り組むことで情報活用スキルの定着が図れた。

１）新聞から学ぶ自主学習：毎週，自主学習として国語科で学んだ新聞の学習をもとに，記事の切り抜きから日常的に読み取る習慣をつけた。影山（2006）は「新聞紙面上に子どもを放り出し，各自気になる記事を選択させ，子ども同士のコミュニケーションを活性化させることは社会科学習には現実性をもたらすのではないか」と示唆している。インターネットニュースではなく，新聞記事を切り抜き，児童が記事にあった見出しを作成することや，話題の中心を抜き出し要約するなど新聞を直接操作させることで社会の課題に触れる機会を増やした。また，記事の中にある単語を辞書などで調べ，理解を深めるとともに，記事に対しての自分の考えを表現させることで批判的思考を高める習慣を身につけられるよう促した。

選ばれる記事には，福祉についての記事も多く含まれていた。成果物は「ノート名人」として教室や交流スペースに掲示することで意欲を高めた。また，配慮を要する児童は友達の掲示を参考にしながら取り組むことで支援を促した。

【手続き】
①記事の切り抜きを貼る。
②記事に見出しをつける。
③大切と思う部分を視写。
④記事の要約をする。
⑤気になる言葉を調べる。
⑥記事への考えを書く。
⑦ふりかえり・感想

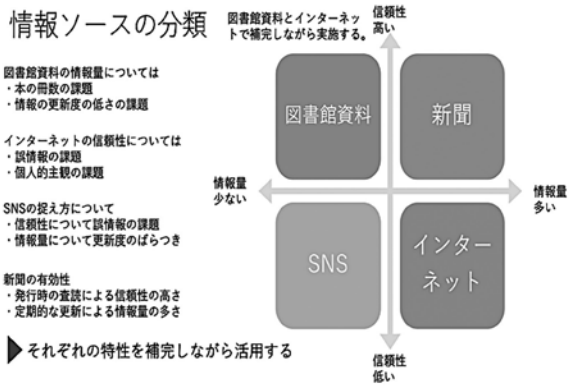
【新聞調べのワーク】



２）絵本と資料の使い分けを：新聞記事より福祉について興味をもった児童らに，“盲導犬”や“点字”などの絵本を読み聞かせた。発達段階として抽象的操作が行えるようになったばかりの児童らは資料やデータより，ストーリー性のある物語の方が興味を示しやすい。そこで，絵本を読み聞かせ，登場人物のすごさや頑張る姿を捉えさせ，自分達も触れてみたいと想像を膨らませた。一方，物語で興味を持ったことなどは図鑑や事典のような図書館資料を活用し，調べ学習へ繋げることとした。図書館活用では児童らの活動内容に合わせて使い分けする必要があることを示した。

３）情報ソースの分類：児童らがさらに学びを深めるため，福祉調べを行った。情報ソースは情報量と信頼性の２次元で検討し，「図書館資料」「インターネット」「SNS」「新聞」の４つに分類した。SNSはエコーチェンバーやフィルターバブルのように偏った情報が示される懸念があり，情報量が少なく，信頼性も低いと判断した。一方，本研究初期から扱ってきた新聞は，宮崎（2024）が「新聞を活用した経験を持たせても新聞を活用しようとするインセンティブにならない」と示した一方，情報収集がSNS中心である社会の中で，新聞を活用した授業の教育効果が大きいと示唆したとおり，児童らは信憑性の高い情報が得られると考えられた。しかし，児童らには難しい表現が多く活用に至るには段階的な学びの構築が必要であった。また，インターネットは情報量こそ多いが，その情報の中から児童らが有用な情報を取捨選択することが難しい。そこで，信頼性が高いが

情報量の少ない図書館資料と情報量が多いが信頼性が低いインターネットは補完し合える側面があると考え，抱き合わせて利用させることとした。



４）情報の選択と表現活動：調べたことは“情報カード”にメモしていった。児童らは新聞の読み取りの習慣から，大事な情報を正確にとらえられるようになっていた。引用する際，記号や図式化，思考ツール等を活用して整理するよう促した。“情報カード”で収集した情報をもとに新聞作りを行った。調べた情報はアウトプットして初めて定着に繋がる。そのため，新聞を作ることを通して，目的に合わせて情報を吟味させ，思考の整理を促した。児童らは何枚もの“情報カード”を比べ，悩みながらつながりを考えて文章を作っていた。また，仕上がった新聞の鑑賞及び紹介し合うことで，自分が調べていないことを友達から教えてもらい相互に補完し合っていた。この活動は以降の学習への土台作りへ繋げることとなった。

２学期の取組み：地域との体験的な活動から

情報活用で得られた知識をもとに，体験や人との出会いから，要支援者や介助者が感じる心情の理解を深めた。





【情報カードの活用例】【鑑賞した福祉まとめ新聞】

１）点字・手話の個人体験：児童は地域の方の指導を受け，自分の名前を挑戦し，習得の大変さや配慮の必要性を感じることで，「話す・聞く」ことの利便性や課題について深められた。

２）アイマスク・車いすの共同活動：利用者・支援者両方の立場を体験することで，移動や道具利用など生活での困り感や細かな配慮，信頼できる関係づくりの大切さについて深められた。

３）当事者・支援者の講話：「障がい者スポーツ選手・認知症サポーター」から力強く前向きに生きる姿や支える人の安心感を伝えられ，人の思いを大切に丁寧寄り添う姿勢に考えを深められた。

４）体験報告会：見聞きしたことを意見体験文としてまとめる中で自問自答し，発表を通して自身の考えがどのように変容したかを確認した。

３学期の取組み：「人の心を大切に」する姿を

事例検討など全４次の計画であった。街のユニバーサルデザインの検討や，地域で福祉支援に関わる方の日常的な配慮を感じることで主体的に行動しようとする姿勢を持たせた。なお，一人ひとりの特性に合わせた関わりを「合理的配慮」ということもここで示した。



１）事例検討・ロールプレイ：２学期に体験等で実際の場面と調べた資料との違いに気づいた児童らに，３学期１次では実際に起こりうるケースを「事例検討」した。提示された場面の「困り感」についての「対応策」をより実践的に検討した。また，児童にロールプレイをさせることで場面の想像をふくらませられるよう工夫した。特に，学校の事例検討では，車いすで生活をしている児童が階段で昇降機を使っていることを紹介し，実際に児童に昇降機の体験をさせた。知識で理解した以上に気配りすることが多く，状況や人の様子を見て行動する必要があることに気づかせた。



【３学期のカリキュラムマネジメント】



【事例検討用ワーク】

２）地域の事例検討：２次ではさらに具体的な場面として地域の公共施設「図書館・駅」について，「肢体不自由」「視覚障害」「聴覚障害」「高齢者」の４領域の計８グループに分け，それぞれの立場について検討した。その後，全体で共通点や相違点を共有しながら比較した。駅では騒音で視覚障害の方はアナウンスが聞こえにくいことや，聴覚障害の方は人通りの多さでぶつかることなど人によって障壁となる課題が違うことがわかった。また，児童らは駅と図書館でも違いを発見していた。活動を通して，駅の券売機にはすでに学んだ点字がつけられていることや階段のスロープなど環境の工夫がされていることを写真や構内図から発見していた。しかし，考えを深める中で，「車いすの人はどうやって電車に乗る？」といった，環境を整えても難しい課題があることにつまずいた。その際，２学期の人の支えを思い返し，「心のバリアフリー」についても深めることができた。このことから，得られた知識と体験から感じた心情が接続を果たし，実体験の場を想定することで実践力となりうることがわかった。

３）福祉職の方からの講話：３次では福祉に関わる職業の方が大切にしていることを知るため，福祉事業者さんから講話を聞いた。支える立場として歩行訓練や体調管理など，利用者さんに関わる際に安心して過ごしてもらえるための工夫や，心を支える気配り，日頃からコミュニケーションがとれるよう心がけていることなどを聞かせてもらい，「人が安心できるために行動することが大切」や「日頃からの関わりが大事」など福祉は人の心を大切にすることだと感じる機会となった。



【デイサービス事業者の講話】



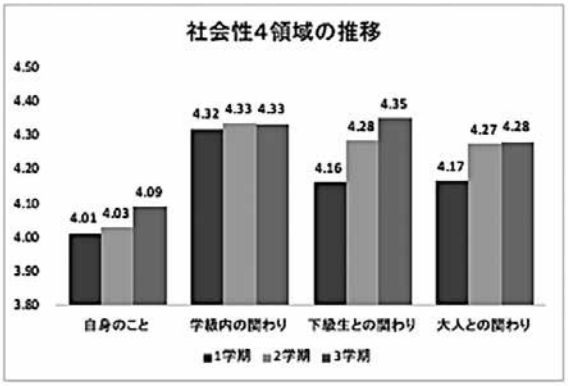
【作業内容と配慮すること】

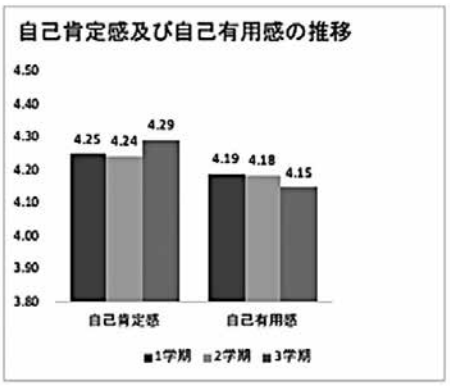


【参観での発表風景】

４）社会への参画：４次ではこれまで学んだことを生かし，地域に自分達の意見を発信するためプレゼンテーション資料を作成し提案した。学んできたことを地域や保護者に返したいという思いを高め，授業参観で発信に至った。児童らにとって発表するためのスライド作成，原稿作り，読み練習などの表現するプロセスの中で学んできたことを振り返り，満足するとともに，地域の福祉を身近に感じている様子であった。また，発表を地域へ還元することで自分達にできることを考え行動するという社会参画の意識を高めていた。







5　結果

実践を通して，各学期に「社会性測定用尺度」を用いて『A自身の社会性と適応』『B学級内の関わり』『C下級生との関わり』『D大人との関わり』(以降略) の４領域の検討を行った。また,『A自身』『B学級』の領域から「キ 今の自分が好き」「オ 相手の話をすなおに聞くことができる」など７項目で『自己肯定感』を,「イ 人の役に立っている」「ケ 相手を助けてあげることができる」など５項目で『自己有用感』を測定した。

社会性測定の結果は，ウェルビーイングにおける，「社会的に」という側面から，人間関係に対する幸福に関与していると考えられ,『D大人との関わり』では，地域での社会性として社会参画する意識の測定につながると考えた。

結果から,『A自身』『C下級生』『D大人』において，得点が上昇している。特に下級生や大人との関わりは１学期から２学期で，自身については２学期から３学期で上昇している。なお，学級の関わりについては大きな変化は見られなかった。また,『自己肯定感』と『自己有用感』において,『自己肯定感』に関しては３学期で大きく上昇した。しかし,『自己有用感』に関しては，学期を追うごとに得点が低下した。

各学期の児童の振り返りから１学期では「福祉に関わる道具や設備について調べることができた」「福祉の人達が町を良くするためにたくさん工夫したり働いたりしているのがわかった。」，２学期では「自分がいいと思ってやったことでも相手が必要なこととちがうときがあることを知った。」「手助けすることにもコツがいることがわかった」，３学期では「身近な場所でも工夫されていることがあって，自分でも考えることができた。」「相手や状況によって関わり方を変える必要がある」「発表することで地域に支えられていることを家族に伝えることができた。」などの意見があった。

6　考察（成果と課題）

本研究では将来主権者となる児童に福祉教育を通して「Ⅰ知識の理解：個別最適な場で情報活用を主体的に行う」「Ⅱ心情の育成：人とつながり，人との関わりをメタ認知する」「Ⅲ実践力の向上：もの・こととつながり，協働活動を通して自己理解や社会参画への意識をもつ」の３点について実践を行い，検証を図った。なお，ウェルビーイングの側面として「地域や社会での幸せや豊かさ」を示していることから学校内外における社会性の高まりを測定することが有用であると考えた。

Ⅰ・Ⅱにおいて，資料活用や地域活用を通して，理論と実践の両面から情報を取り入れることで知識や経験に偏ることなく気づきの質を高め，専門性を高めつつも自身の価値観や関わり方について改めて考える機会を得た。また，新聞や体験報告など段階的に表現する場を作ることで，児童のその時点での知識・思考を確認しながら進めることで，実践力につながる主体性を高めることができた。特に,「C下級生」「D大人」において，１学期に得点が大きく上昇していることから，児童らにとって情報活用を通して知識を得ることは周囲への意識を高めるきっかけ作りに大きな影響を及ぼしていることがわかる。一方,「自己肯定感」「自

己有用観」において得点がほぼ変わっていないことから，知識を得ることだけでは児童ら自身の捉えが高まるには至らないことがわかる。そこで，２学期での地域人材の活用を通して実際に体験することで，当事者や支援者の心情理解につなげ，児童の想定と実態での乖離が生じることを感じさせることが必要であった。ただし，ふりかえりの結果より，この体験活動での捉えは疑似体験の場に限定されており，児童らは実際の地域・社会の場面まで想定はできていない様子であった。

Ⅲにおいて，Ⅰ・Ⅱの学びを土台に意図的に事例を比較，検討することで地域・社会との連結を図った。先行のQOLや自尊感情についての知見から発達段階が上がるにつれて「自己肯定感」や「自己有用感」は下がる傾向があると示されているが，３学期に「自己肯定感」が上昇したことから事例検討や学習発表などを通して，身近なこととしてとらえ，自分達が主体であると意識して取り組むことで，自ら考える力があると実感し，実践力の素地を作れたことが考えられる。しかし，活動が仮想の事例にとどまったことや，保護者や学校内，一部の地域の方には発信できたものの地域で実践する場面が少なかったことで，実際に行動できるという「自己有用感」が高まるには至らなかった。得られた情報や経験を実践力に繋げるためには発信の仕方を工夫し，児童らに地域で実際に活動する場面が必要であると考えられる。

７　まとめ

１）情報活用とメディアリテラシー

情報活用において，図書館資料やインターネット検索，新聞での情報取得に加え，選択，整理し表現ができるようになった。NIEの考え方をもとに，新聞記事から最新の情報を得る習慣をつけていくことは，社会に関心をもち，自分の考えをもつという習慣をつけていくことにつながり，リテラシー育成に寄与すると考えられる。また，図書館やインターネットの活用を加え，選択肢を与えることは近年課題となるICT活用も含めたメディアリテラシーや批判的思考力の向上にもつながっていることであろう。しかし，目的をもって情報収集を行うにあたり，目的に沿った情報を得ようとする思考があることでSNS以外でも偏った情報収集となり情報が見えにくくなるという課題はインターネットや図書館資料においても同様にありうるのではという課題も明らかとなった。

２）地域活用と福祉教育

福祉を主題とし，地域人材の活用や地域の事例を扱い，実践力の向上にむけて事例を比較，検討することで地域・社会との連結を図った。地域の方々の話から，実体験にもとづいた話を聞くことや，実際の地域についての検討は，地域に向けての視野の広がりや相手意識の持ち方など一定の社会性向上には寄与していたといえる。ただし，まだまだ疑似体験の場に限定されており，想定が浅い様子であった。また，実践力が高まったかどうかの評価が難しいうえ，福祉領域の広さ，深さからどの程度理解させるのが適切かということも判断も難しかった。このことから，情報活用や仮想事例での体験のような切り分けられた学びを扱うことには限界があり，実際に地域社会に出て，児童ら自身が社会参画する中で学ぶ機会が必要であったと考えられる。

３）主権者教育とウェルビーイング

情報活用と地域活用を両立させて取り組ませることは，得た知識と心情理解を地域で過ごす上で活用できる実践力につなげ，主権者教育の取り組みとして地域参画する意識を高める主体性を向上させることにつながったと考えられる。また，そのプロセスを通して地域や学校内での社会性を醸成することは，自己肯定感や学校や地域での人とのつながりといった一定の児童のウェルビーイングに寄与したといえよう。しかし，OECD (2018) で示された日本の課題として社会情緒的な発達が挙げられ，中でも自己有用感や人生の意義，生活満足感の低さを指摘されていることから，「協調的ウェルビーイング」の利他性や社会貢献意識などにおいて，地域福祉から地域社会全般へ汎化させることはまだまだ難しく感じられる。現在広が

りつつあるコミュニティスクールや地域教育協議会などの地域活動への参加も含め，児童らに学んだことをどのような形で発信することで，どのような効果が得られるかを今後検討していく必要がある。

8　おわりに

本研究では時事課題を収集しつつ，資料での情報活用を行うとともに，地域との交流を行い，福祉教育について理解を深めていくことで，児童は自身が主権者である社会参画意識を高めながら学習に取り組むことができた。育成された側面として「情報活用能力」「心理・社会性の向上」「合理的配慮の理解」「表現力」などが挙げられる。

なお，資料活用と地域活用を両立して取り組むことで，理論と実践の両面から情報を取り入れることで知識面や心情面のどちらかだけに偏ることなく気づきの質を高め，自身の価値観や関わり方について改めて考える機会を得た。また，実際の場面を想定することで，合理的配慮をともなった実践力につながる主体性を高めることができた。

今後は，地域への還元を目指して児童が社会福祉へどのように参画できる場面を作るかを検討しつつ，社会進出への礎となるよう指導していきたい。



9　参照文献

文部科学省（2023）「第４期教育振興基本計画」.
文部科学省（2022）「『主権者として求められる力』を子供たちに育むために」.
赤松幹（2023）「主権者教育＋メディアリテラシー＝NIE」『日本NIE学会誌』第18号，p.7.
文部科学省（2017）「小学校学習指導要領解説社会編」.
織田隆敬（2016）「主権者教育の推進・充実のために」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究』第１巻，pp.131-139.
大阪府庁（2010）「大阪府福祉教育指導資料集『ぬくもり』―思いやりを行動へ―」.
影山清四郎（2006）『学びを開くNIE「新聞を使ってどう教えるか」』，pp.26-40，春風社.
国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2004）『「社会性の基礎」を育む「交流活動」・「体験活動」―「人とかかわる喜び」をもつ児童生徒に―』.
宮崎三喜男（2024）「高校生の情報収集についての意識調査とNIE授業が新聞活用に与える影響」『日本NIE学会誌』第19号，pp.47-56.
OECD（2018）「Child Well-being Dashboard」PISA2018生徒質問調査.

本論文は、筆者が公益財団法人日本教育公務員弘済会の2024年度教育実践論文に応募したものを、日本NIE学会機関誌編集委員会の求めに応じ、加筆修正したものである。

吉原久貴（2024）「社会の一員として地域に広がる主体的な福祉学習 ～実践力を高める『地域・社会のしくみを探る調 査プロジェクト』を通して～ 」

メディアリテラシーを育むNIE探究活動

～日本NIE学会主催「NIE生徒研究発表会」の取り組みを通して

NIE Inquiry Activities to Foster Media Literacy
~Through “the NIE Students’ Research Presentation Conference” Organized by The Japan Society for Studies in NIE

為　重　慎　一
Shin’ichi TAMESHIGE
（広島国際学院中学校・高等学校）

１．はじめに

適切に情報をつかみ，主体的，共感的，批判的に社会をみる力を身に付けていく。現代においてメディアリテラシーの取得は，学校教育に課せられた重要なテーマである。ある事象に対して「正しい」と判断するか，「誤り」と結論付けるか。いずれの場合も，それを主張する「理由」や「根拠」，どのように「評価」したかが明確に示されなければならない。

今回の実践では，情報との１）付き合い方，２）活用方法，そして３）情報の評価方法（共感，批判など）について１年間取り組んできた。一連の活動の中で，日本ＮＩＥ学会主催の「ＮＩＥ生徒研究発表会」での取り組みを通して探究活動を行い，生徒のメディアリテラシーの成長を図る試みを行った。

２．対象生徒のメディアリテラシー実態

実践前に，活動対象となった普通科国際教養コース２年生（16名）に対し，１）家庭での新聞購読，２）生徒各自の文章力・読解力のアンケートを行った。

質問１．家庭で新聞を講読していますか？

講読している	２名	12.5%
不定期に購読している	１名	6.3%
購読していない	13名	81.2%

質問２．新聞は読みますか？

毎日読む	０名	０％
時々読む	３名	18.8%
学習活動として読む	４名	25%
読まない	９名	56.2%

質問３．文章読解力を自己評価してください。

得意（80%）	０名	０％
普通（60%）	７名	43.8%
あまり得意ではない（40%）	９名	56.2%
不得意（20%）	０名	０％

質問４．文章作成力を自己評価してください。

得意（80%）	２名	12.5%
普通（60%）	４名	25%
あまり得意ではない（40%）	10名	62.5%
不得意（20%）	０名	０％

まず家庭での新聞購読は，２割程度（３名）という結果であった。今日の新聞離れを反映するかのように，多くの生徒が家庭で新聞を読んでいない現状であった。

一方，この実践を取り組むようになり，「時々読む」,「学習活動として読む」生徒が４割（７名）と，必要に応じて読む意識は持つようになっている。最後に質問した読解力や文章作成力については，いずれも４割程度，「ある程度読解力（文章作成力）がある」と回答していた。クラス内で得意，不得意が偏っていないため，相互で協力しながら学習できる環境になりつつある。

３．実践計画ならびに実践の方針について

対象生徒の現状を踏まえ，今回の実践では，最初に，メディアリテラシーの下地を作る活動＝文章作成力，読解力を身に付ける練習を行った。学習の動機づけとしては，日本新聞協会主催の「一緒によもう！新聞コンクール」への出品を通し，情報の収集活動や活用法，また生徒間で選んだ記事やそれぞれの意見を情報交換し評価することに取り組んだ**（表１参照）**。その後は，探究活動を通してメディアリテラシーの学びを深める実践を行った。この活動では，日本NIE学会主催の「ＮＩＥ生徒研究発表会」への参加を通して，生徒各自のメディアリテラシーについて外部評価を取り入れながら学習を進めた。

単元指導・評価計画　　科目：異文化理解　・単位数２・学年〔 国際教養コース・２年〕

単元名	NIE学習を通して、読解力・文章作成能力を高める
単元目標	（１）新聞を活用した異文化理解を深める （２）新聞を通し多様な分野を知る・読み解く力をつける （３）新聞を題材として受験に必要な文章力を身に付ける

実施時期	教科書・教材等
2023年　４月～	新聞各紙

授業計画（概要～授業開始～中間試験まで～みんなの新聞コンクールを活用した学習→みんなの新聞コンクールにチャレンジ！）

授業	小単元・項目	ねらい・目標・展開工夫など
1	ガイダンス＆アンケートの実施	○授業の目標・学習計画を提示。 ○授業前アンケート（新聞の購読・活用・興味ある分野・進路先・各自の読解力・文章力を自己評価）。
2	授業① 新聞に慣れ親しむ	○読解力・文章力確認→社説を活用。５分読解、10分200字要約、10分で200字意見文作成。 ○意見交流→５分程度で交流→他者の意見をメモする。 ○宿題→意見・感想を書く(300字以内）→一緒によもう！新聞コンクールへの接続であることを伝える。
3 4	授業②～③：自己の力を知る	○読解力・文章力確認→社説を活用。５分読解、10分で200字要約、10分で200字意見文作成。 ○意見交流（交流者は前回と別）→５分程度で交流→他者の意見をメモする。 ○宿題→意見・感想を書く（300字以内）。
5	授業③：他者の力を知る	○いっしょによもう！新聞コンクール優秀者の作品を通して、分析を行う→優秀者の作品を確認。 ○優秀者の良さ、自分の文章との違いを確認、作成させる→10分程度。 ○意見交流を行う→５分程度で交流→他者の意見をメモする。 ○宿題→自分の文章がどのように変化すればよいかを考える。
6	授業④：みんなで力を高める・共有する	○いっしょによもう新聞コンクール優秀者の作品を分析を通し、良い文章の書き方のアイディアを出させる。 ○４人１組のグループで交流会をする→10分程度で交流→他者の意見をメモする。
7・8	授業⑤・⑥：一緒によもう新聞コンクールにチャレンジ！	○一緒によもう！新聞コンクールにむけた記事を収集→記事の収集・意見文の作成を行う。 ○他者から意見をもらう。 ○意見文を作成→完成させる。

達成目標：コンクールを通した読解力・文章力の向上を図る、交流を通し他者の意見を聞く力を身に付ける。
他者の意見を基に、共有し、自らの意見を発展させる

授業計画（概要～中間試験後～SDGsから地域をみる世界に広げる→NIE生徒研究発表会につなげる）		
授業	小単元・項目	ねらい・目標・展開工夫など
1	授業①：SDGｓとは何か？学びを深めよう	○担当教員よりSDGsのイロハを学習→図書室よりSDGｓに関する本を借りる。 ○SDGsの見方・考え方を養う→目標達成にむけて必要なことを学ぶ。 ○SDGｓの中で興味関心のある項目を選択。
2	授業②：ＳＤＧｓをマスターしよう	○SDGｓの17の目標が理解できているかのテストを行う→２種類準備。穴埋めと文章選択（個人学習）。 ○ケーススタディを用いて社会問題がどのＳＤＧｓに関連するかを学ぶ（個人学習）。 ○新聞を活用して、内容がＳＤＧｓのどれに当たるかを「ペタッとＳＤＧｓ」を用いて確認→グループ戦で、同じ内容でそれぞれの視点を確認する。
3	授業③：社会の諸問題にスポットをあて、SDGｓで考えよう	○総合的探求活動に向け、SDGｓの内容のどこに注目して、学習活動を行うか考える。 ○ワークシートを用いて、どのような社会問題に注目しているか、理由、原因、解決法をまとめさせる →必要資料は何かを調べさせる。
4	授業④・⑤・⑥：各テーマにそって調べ学習をしよう	○授業③より、各自で調べるために必要とする書籍・データ文献を調べる。 ○ワークシートを使って作成を行う→テーマ・概要・問題の原因・背景・客観的（肯定的思考力と批判的思考力な目で問題をみる、SDGsの視点でどのように考えるか。

（表１：学習計画）

４．実践報告

（１）「一緒によもう！新聞コンクール」を活用したメディアリテラシー活動

本実践では，１）生徒自身が新聞情報からメディアに慣れ親しむ機会を作ること，２）知り得た情報を主体的に学ぶこと，３）自己の学びと他者のものを比較し，情報活用の分析，評価方法を学ぶことを目的とした。

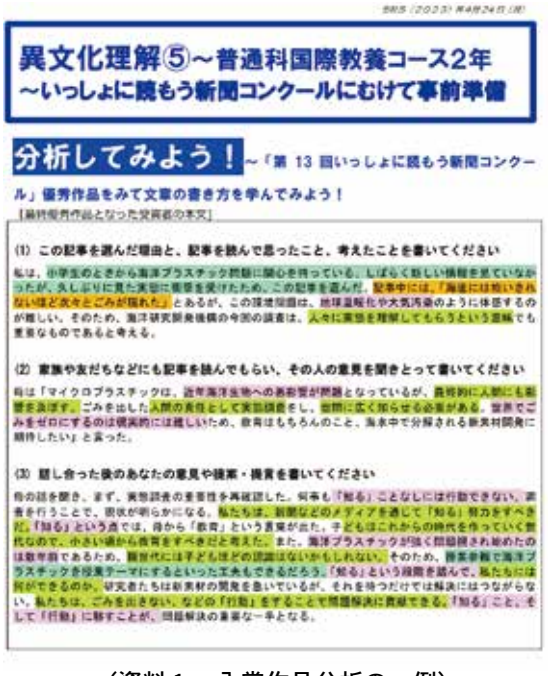
第一段階：提供された新聞記事を読み，意見文の作成，意見交換を行う活動

実践する生徒たちの新聞購読は高くないことからも，新聞に触れる機会，新聞の機能を知る回数を増やすことが必要である。よって，１）教師からの新聞提示，２）指定された時間での熟読，３）意見文・要約作成，４）各生徒間での意見交流する活動を３回実施した。

第二段階：他者の作品（意見文）の分析，評価を行い，自らの意見文に活用する

自らの新聞の読み方，記事に対するとらえ方は，他者と比べてどのような違いがあるか。第一段階の活動の後，「一緒によもう！新聞コンクール」において入賞を果たした生徒の作品に触れ，他者が取得したメディアリテラシーから自己の能力を高める活動を行った[1)]。

この実践に際して，生徒達には以下の形で分析を行わせた。１）コンクールの入賞作品であることを伏せておくこと。２）参考作品は生徒たちと同年代のものを使用する。３）対象生徒と同じく，作品作成のためのアドバイスをするという形とした。


異文化理解⑤～普通科国際教養コース2年
～いっしょに読もう新聞コンクールにむけて事前準備

分析してみよう！～「第 13 回いっしょに読もう新聞コンクール」優秀作品をみて文章の書き方を学んでみよう！

（資料１：入賞作品分析の一例）

分析では，1）参考にした点，2）課題点，3）作品の特徴を分析させた。生徒たちの分析は以下の通りである。

（生徒の分析の一例）
○新聞記事の引用を効果的におこなっており，独りよがりの意見文となっていない。
○意見文が過去→現在→未来への展望という流れが出来ている。
○自分中心の主張だけでなく当事者の立場での書き方が出来ている。

以上の分析を文章作成の参考にした。なおこの分析は，実践者（教師）からの分析も併せて紹介し，多様な視点で学ぶ機会を作った。


＊先生が思ったこの文章の良い点はコレ！
（1）の良い点
（2）の良い点
（3）の良い点

（資料２：教師による入賞作品分析）

第三段階：コンクール作品を制作する

最後は，生徒達による作品の制作である。制作では事前学習での選定，分析，相互評価を適宜行ったおかげで，比較的円滑に意見文を作成することが出来た。

なお，この実践で特徴的だったことは，自らが興味関心のある内容を複数記事から分析，比較読みをして意見文を作成していたことである。考えられる理由として，1）話題の背景を理解するためには関連記事を収集，読解する必要性があること，2）選定した話題が賛否のいずれかに偏重している場合，なぜ賛否が分かれるのかを知るため，3）戦争に関する記事のように，被害者・加害者・中立的な視点で書かれるものは，その論調が大きく異なることに気づいたことが考えられた。

（2） 他者評価を活用しメディアリテラシーを考える～「NIE生徒研究発表会」での発表活動

主体的に情報を選択，活用する能力を磨く活動には，他者評価による再確認も必要である。その機会として，日本NIE学会が主催する「NIE生徒研究発表会」に参加し，外部評価より生徒たちのメディアリテラシーを再確認する活動を行った。

新聞を使った学習や新聞を対象とした研究活動を行う生徒に対し，学会に所属する研究者からの助言，多くの評価がいただける企画として大変有効であると感じ参加するに至った。

今回，これまでの学びを活かし，生徒たちが本実践と並行して取り組んだ「SDGsに関連する探究学習」を学習成果として披露した。

本発表での目標設定は以下の通りとした。

○気軽に活用できるSNS，インターネットに頼らず各自で設定したSDGｓを調査する。
○書籍や新聞を活用し，専門性且つ新鮮な情報で調査を行う。
○自分ごと⇔他人ごとのハイブリットな考え，主張を試みる。
○主体的に知り得た情報の評価を行う。

第一段階：プレ大会に向けた実践

①生徒が興味関心のあるSDGs分野を選択。各自，関連する資料を，1）インターネット（後述する新聞データベース），2）図書室での文献検索，3）新聞から調査を実施。
②収集した情報は授業支援アプリに蓄積。必要な情報はデジタルマーカーでチェックした。
③調査を新鮮且つ身近なものとするため，新聞記事を活用。また膨大な新聞からデータを抽出するため，中国新聞社「教育データベース」を活用した。
④①～③の活動の後，壁新聞を作成。これまでの活動を活かすため，1）他者に興味を持ってもらう内容，2）過去～未来につながる展開，3）自分ごと⇔他人ごとの視点で主張する工夫を行った。

一連の流れを「プレ大会」にて発表。学会参

加者から修正点，発展させるべき点について次のような助言をいただいた。

（学会の先生方から頂いた助言）

助言１：壁新聞内に新聞，書籍の情報の導入が効果的にできていなかった。引用，評価，活用方法が明確に示されるよう工夫が必要。

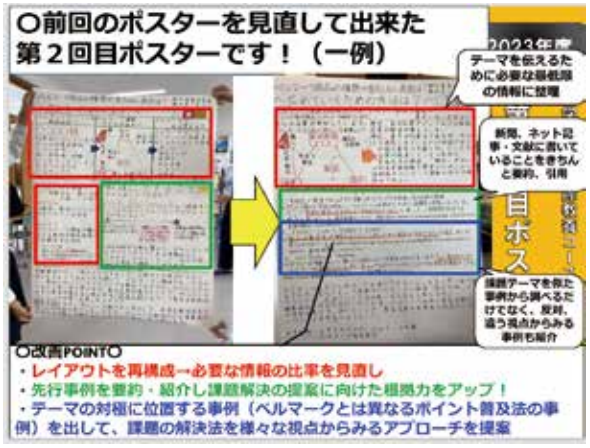
助言２：テーマに該当する資料が入手できなかった時，テーマと対極な情報やテーマに類似する情報から調査の幅を広げてみるべき。

助言３：情報を活用する際，知っている情報を活用するだけでなく，知らない（知られていない）情報にも目を向ける必要がある。

生徒達は研究をする際，答えのあるものに研究の終着点を見出す傾向がある。ゆえに，調査テーマと同質な情報のみに目を向けてしまう。そのような目線を見直す上でも，外部評価は，生徒達にとってメディアリテラシーを考えるきっかけに繋がった。以上の助言を参考に，２回目の実践を行った。

第二段階：本大会に向けた実践

①大手新聞社の新聞記事にも範囲を広げ，情報収集にあたる。
②インターネットを活用して地方記事にも調査を広げる。
③各自のテーマと対極になる内容や，類似した内容にも幅を広げ調査を行う。
④第１回目壁新聞を見直す。壁新聞内で使用したキーワードに対し，新聞や書籍を引用できる箇所を見つけ，修正箇所を示す。また，ポスターのレイアウトについては，どの場所に記事を活用することが効果的かを考えさせた。



（資料３：修正した壁新聞の特徴，改善点）

一連の修正によって，各自の壁新聞は次のように改善された。

○レイアウトを再構成し，必要な情報の比率を見直した。
○先行事例を要約・紹介し課題解決の提案に向けた根拠を向上させた。
○テーマの対極に位置する事例を引用し，課題の解決法を様々な視点からみるアプローチを提案させた。

（本大会での評価について）

12月10日に実施された本選会では，15分間の発表ならびに５分間の質疑応答の中で，生徒達はSDGsに関するメディアリテラシーの取り組みと，成果について発表した。学会参加者からは以下の評価をいただいた。

○とりあげた内容が一般的な文言で語られていたケースが多いと感じました。変化やこだわりをもう少し具体例を挙げて成果の特徴や面白さが伝われば共感を呼ぶと思います。

○研究に着手する前に，予想される問題点を考察している点がとても良いと思いました。その良さは，読解力・文章作成能力・発表力を育む目的を重視しているためと拝察しました。

○８月のプレ発表よりも飛躍的に良くなったと思います。成長が見られました。

○さらに研究を良くするために，ポスターを記者や学校外の方に見てもらい，相手に伝える／伝わる文章表現や論旨展開を磨くとよいと思います。

○多角的に物事を見るための手順を自己分析し，思考の仕方を深く学ぶことができたことが見て取れました。



５．実践の成果と課題

今回の実践では，初めて学会発表に参加させ，学外の不特定多数の人達に対し，１）活用した情報を伝え，２）他者の意見を受け，どのように共感的，批判的に解釈していくか，３）助言を通し，自らの情報活用能力を工夫，変化させるかを学びの軸とした。

本実践を通し，生徒達は一定の成長ができた。まず，普段活用できていない新聞を通し，「論の立て方」・「根拠の提示」・「活用した情報より自分の意見を組み立てる」といった能力を磨けたと思われる。第二に，与えられた課題や問題に対し，肯定的，共感的な意見，解答しかできなかった学びに，「対極，別視点で物事をみる意識」，「入手した情報の関係性を分析する活動」，「情報を精査し自らにとって必要な情報を選択する力」を体験できたと感じた。

一方，現時点での能力に限界や課題を感じることも出来た。特に，情報の対極にある情報，自らのテーマと同類の情報を発見する力は，支援者である教員や外部からの指摘なしでは，充分な活動には至れなかった。生徒達にとり，日ごろからの情報収集や活字に読み慣れる習慣が今後必要となる。

しかし，自らの問題点や今後の目標を発見し，改善しようとする意識がみられたことも前向きな成果として出てきた。

今日の社会は，乱立する情報を自らの力で的確に選択し，判断する力が必要となる。フェイクニュースに惑わされない社会の形成者となるためには，より多くの情報に触れ，それを試行錯誤しながら，自らにあった情報に出会うための経験が求められる。様々な情報に触れる機会，また学外でその成果を発表，評価してもらう機会を今後も増やし，生徒たちがそれを元手に主体的に学びを深めてくれるよう今後も取り組んでいきたい。

【註】

１）「第13回一緒に読もう新聞コンクール受賞作」を活用し，分析を行った。

①広島大学附属高等学校１年神尾惺那さんの作品
https://nie.jp/month/contest_newspaper/2022/detail/１-3.html（最終閲覧日2023年５月）。

②尚絅学院高等学校３年岩澤麗流夏さんの作品
https://nie.jp/month/contest_newspaper/2022/detail/４-22.html（最終閲覧日2023年５月）。

③都立国際高等学校２年二ノ宮リム虹さんの作品
https://nie.jp/month/contest_newspaper/2022/detail/４-25.html（最終閲覧日2023年５月）。

【参考文献】

宮弘美『NIE実践ワークブック　新聞で身につく日本語力』国書刊行会，2015年３月。

関口修司監修『新聞で授業が変わる　学習指導要領に沿って　NIEガイドブック　高等学校編』日本新聞協会，2022年７月。

NIE FORUM

NEWSPAPER IN EDUCATION

2024 No.3

CONTENTS

Special article

To Enhance Practical Skills of Thinking Independently and Acting Based on Information
– Proactive Welfare Learning Spreading into the Local Community as a Member of Society–
……Hisaki YOSHIHARA 1

Practice Report

NIE Inquiry Activities to Foster Media Literacy
~Through "the NIE Students' Research Presentation Conference"
Organized by The Japan Society for Studies in NIE
……Shin'ichi TAMESHIGE 9

The Bulletin of the Japan Society
for Studies in "Newspaper in Education"